

國學院大學學術情報リポジトリ

中国における日本映画週間の歴史的考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 孫, 雪梅 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001633

中国における日本映画週間の歴史的考察

A Historical investigation on Japan film week in China

孫 雪 梅

キーワード：中国 日本 映画週間 文化交流 歴史的考察

关键词：中国 日本 电影周 文化交流 历史考察

要旨

中国が日本映画週間を開催することは、今まで65年の歴史を持つ。総じてみれば、だいたい三つの段階に分けられる。すなわち1978年以前、1978年から1991年まで、1992年から今まで。比較して言うと、この三つの段階はそれぞれ中国における日本映画週間の始まり、隆盛と常態化を示している。その開催する時代背景の違いがあり、開催地の選択も異なった。その上選択された映画内容の制限などによって、自然にもたらした影響も同時に論じることもできない。

摘要

中国举办日本电影周展映活动的历史，迄今已有65年。总的来看，大体可分为三个阶段，即1978年以前、1978年至1991年和1992年至今。比较而言，这三个阶段分别代表了日本电影周在中国的肇始、兴盛发展及存在的常态化。中国的日本电影周，因其举办之际的时代背景不尽相同，在举办地的选择上亦有所差异，加之所选电影内容的限制，所造成的影响自然不可同日而语。

はじめに

中華人民共和国が成立して以来、中日両国間の文化交流が少しずつ展開し、その形式もますます多様化になってきた。その中の一つとしては、お互いに映画週間を開催することである。中国における日本映画週間は初めて1956年に行われ、今まで65年が経った。溯ってみれば、その歴史を三つの段階に分けられる。一つは1978年以前、二つは1978年から1991年まで、三つは1992年から今まで。映画とテレビ文化の影響が日増しに拡大する目下、中国における日本映画週間の歴史を振り返って、そのもたらした影響と果たした役割を検討し、さらに開拓を要するやり方と方向を提示することは、今後の中日文化交流に役立ちたいと思う。

一、日本映画週間の始まり

中国において最も早く開催された日本映画週間は前世紀の1956年のことだった。その時、勝利を遂げた抗日戦争がすでに11年が経ち、中華人民共和国が成立して6年余が過ぎた。中日両国間の国交がまだ回復されていなかったが、民間レベルの交流、特に京劇・映画などをはじめとする文化交流がすでに展開されていた。1956年6月7日、「人民日報」が第4面の右側の下に次のような広告を掲載していた。

中国人民対外文化協会・中国映画関係者交流会準備委員会が日本映画週道を共催することになる。北京・天津・上海・瀋陽・ハルビン・武漢・広州などの10主要都市で相次いで行ふ。北京市での開催する時間は6月13日から19日まで、合わせて5作品を上映し、すべて甲級映画館で公開する。⁽¹⁾

その次、この5作品についてわりに詳しく紹介した。紹介された内容には、題名、日本の製作会社、中国の翻訳・製作機関、原作、脚色、監督、撮影、翻訳、吹き替え監督、出演者、吹き替え出演者及び映画のあらすじがある。この5本の日本映画はそれぞれ『太陽のない街』（1954年新星映画製作）、『愛すればこそ』（1955年独立映画製作）、『ここに泉あり』（1955年中央映画製作）、『最後の女達』（1954年創映プロ製作）と『二十四の瞳』（1954年松竹（大船撮影所）製作）で、皆1954年～1955年に製作されたので、当時では最も新しい作品といえる。しかし、今からみればちょっと遠く離れていて、理解に便利するために、その年の「人民日報」に載っているこれらの映画のあらすじを次のように引用する。

『太陽のない街』：三十年前東京随一のある印刷工場の労働者のストライキを題材に、日本の労働者階級が戦いの中で親しく団結し、勇ましく戦う精神を生き生きと描いている。

『愛すればこそ』：この映画は三話からなっている。「花売り娘」はある花を売る娘とある女給の悲惨な境遇を描いている。「飛び込んだ花嫁」は日本の農村と都市の貧しく惨めな境遇を反映している。「愛すればこそ」は日本人民が祖国の独立を実現するために、戦うしかないということを指摘している。

『最後の女達』：第二次世界大戦時のサイパンの戦いを通じて、戦争で破壊さ

(1) 「人民日報」1956年6月7日第4面。

れたある家族を背景に、日本のファシズム体制の下で侵略戦争を起こした残酷とその罪を暴いた。

『ここに泉あり』：日本のある地方の音楽グループが庶民に美しい音楽を与えるために、重なった困難を乗り越えて、ようやく成功したという物語を描いている。中には世界有名なメロディヤーを素晴らしく演奏したシーンがある。

『二十四の瞳』：小学校の大石先生とその教え子12人の生活遭遇を通じて、戦争が日本人民にもたらした貧しさと苦しさを反映している。⁽²⁾

以上のように、これらの5作品は主に日本国民の惨めな生活と屈服しない戦い、及び戦争で被った苦痛を反映しているとみられる。その基本的な思想あるいは主題は戦争に反対、資本主義に反対するというところにまとめられる。

1956年6月23日の夜、日本映画週間の開幕式は北京で行われ、当時中国人民対外文化協会副会長を務める陽翰笙が開幕の挨拶をした。彼はまず近年来中日両国がそれぞれ映画分野において遂げた業績を振り返った。そして、「まさに美しく生き生きとして、強い影響力を持つ日本映画は日本人民の生活、戦いと理想を深く反映しているように、中日両国の映画芸術家たちの交流は両国人民の心の中で偉大な相互同情と友情を引き起こすことができるのです。」⁽³⁾と指摘した。監督木下恵介、女優杉村春子をはじめとする日本映画界の代表たちが開幕式に出席した。開幕式後、木下恵介が監督としての『二十四の瞳』を上映した。

この前広告した時間とちょっと違って、「人民日報」が6月24日から28日まで第4面右側の下に、この5作品が北京市の新中国・中央・勝利・崇光など12の映画館で上映するニュースが載っている。と同時に、日本映画週間は6月20日から26日まで上海の封切館17館で開催された。さらに、瀋陽・広州などほかの8都市で相次いで行われた。このように、『二十四の瞳』をはじめとする日本映画の5作品が集中的に中国人の視線に入った。

このほか、「人民日報」が6月24日、26日と28日にその第3面で、日本映画週間に関する感想文3篇を連続的に掲載していた。そのテーマはそれぞれ「日本映画週間の所感」、「日本映画の悲劇——日本映画『最後の女達』を見る」と「短篇——映画芸術の手軽な武器——日本映画短篇集『愛すればこそ』を見る感想」であ

(2) 「人民日報」1956年6月7日第4面。

(3) 「人民日報」1956年6月24日第1面。

る。文化部副部長夏衍が「日本映画週間の所感」という文章の中に、「この5作品が全部悲劇である。深く考えさせる悲劇だというべきだ。……これらの作品から、我々は普通の日本人の素朴さ、善良と生き延びるための粘り強さを感じさせた。」⁽⁴⁾と書いた。実は、決定的なのはこの5作品に描かれた主題が、ほとんど当時中国が堅持している資本主義に反対し、和平で発展するという基本的な主張とぴったり合っていて、中国人観客の納得が得られやすくなったと思う。

残念なことに、今回の日本映画週間は盛んに行われていたが、めったにない物のように終了した後、続きがなかった。その後の20年の間、中国で日本映画を上映したことがあるが、それは日本の軍国主義を批判するため、あるいは内部の参考として上映したわずかなものに過ぎなく、正式的な文化交流といえない。

二、日本映画週間の隆盛

1972年、中日双方の努力で、国交の正常化を実現した。にもかかわらず、両国間の幅広く多様な文化交流はやはり1978年に入ってから、着実に展開されてきた。1978年8月、中日平和友好条約を締結した。文化交流のシンボルとしては、この年の10月26日から11月1日まで、中国对外友好協会・中日友好協会・中国映画協会が第1回日本映画週間を共催した。その時、中国はすでに文化大革命の混乱を終わらせて、年末に改革開放を実施した。歴史からみれば、これは中国で行われる2回目の日本映画週間だが、20年前と比較してその影響力は想像以上に強かったと思われる。

今回の日本映画週間は北京・天津・上海など8都市で行い、『君よ憤怒の河を渉れ』（1976年大映・永田プロ製作）、『サンダカン八番娼館 望郷』（1974年東宝製作）と『キタキツネ物語』（1978年Sanrio Company, Ltd.製作）という3作品を公開した。3本の中に、前2本は劇映画に対して、『キタキツネ物語』は動物家族に関するドキュメンタリー映画である。

この3本の日本映画は長い間束縛されていた中国社会に視覚的なショックをもたらし、短い時間で日本映画ブームを引き起こした。特に、『君よ憤怒の河を渉れ』は中国の観客に好まれ、主演の高倉健と中野良子が若者たちにアイドルとみ

(4) 「人民日報」1956年6月24日第3面。

なされた。寡黙かつ冷やかかで、剛毅な高倉健のイメージを男らしい男と、好き嫌いがはっきりしていて野性的な魅力を持つヒロイン真由美のことを新しい時代における女性の代表と憧れていた。さらに、真由美という名前は中国語の「真優美」という言葉の発音と似ていて、彼女への印象が一層よくなった。この前、ほとんどの中国人が日本、日本人のことを言うと、まず侵略者としての「日本鬼子」を思い出した。『君よ憤怒の河を渉れ』を見た後、その視線と話題が現代日本と日本人の生活に移し始めた。

このほか、『サンダカン八番娼館 望郷』も大きな注目を引き起こした。人々はこれらの映画の思想・芸術性及びその影響、若者たちへの教育意味の有無、いかに外国の文芸作品を扱うのか、などの問題について十分な討論を行った。ある観客は「この前、私はよく鉄かぶと、銃剣、長靴を日本と一緒に考えていたが、『サンダカン八番娼館 望郷』を見た後、日本にも貧乏人がいると分かるようになった。日本の貧乏人も私たちの祖父母・父母の世代が旧社会で味わった苦しみに遭ったことがある。彼らも侵略戦争の被害者であると思う。」と指摘した。⁽⁵⁾ 中国の観客がこのように教えられたと同時に、日本人俳優たちの演技にも感心して褒めたたえた。また、きれいで優しい栗原小巻も中国の観客に深い印象を残した。

ここからスタートして、日本映画週間は十数年間にわたって中国の多くの都市で開催された。翌年の1979年、第2回日本映画週間は北京・上海など4都市で盛大に行われた。人民代表大会常務委員会副委員長鄧穎超が北京で開幕式前のレセプションに出席した。岡田茂、徳間康快を団長・副団長とする日本映画界代表団一同15人及び日本映画界の来訪者たちが映画週間の活動に参加した。今回公開された映画は合わせて5本で、それぞれ『愛と死』(1971年松竹映製作)、『先生のつうしんぼ』(1977年日活製作)、『お吟さま』(1978年宝塚製作)、『金環蝕』(1975年大映製作)とアニメ『龍の子太郎』(1979年東映動画製作)である。そして、『愛と死』と『お吟さま』の主演は中国の観客によく知られている栗原小巻と中野良子なので、その影響力が無視できない。彼女たちが演じているラブストーリーは悲しいと感じさせる一方、美しいと感動させる。これも中国の日本映画ブームが持続的に沸くことを引き起こした。

1979年の「大衆映画」第9期に、今回の日本映画週間に関する内容は7頁もあ

(5) 「大衆映画」1979年第1期、第10、12頁。

る。また、第9期の裏表紙に『愛と死』の男女主役の恋模様のカラー写真が載っている。『お吟さま』については、その年の「大衆映画」第3、第4期にすでにカラー写真と文字で紹介されたので、第9期の紹介は主にほかの4本をめぐって展開した。紹介する内容からみれば、明らかに『愛と死』を偏重している。その芸術の特色などの角度から検討するだけではなく、さらに音声に対する運用の巧みも分析した。そして、主演の栗原小巻と中野良子についてもわざわざ文章で紹介した。⁽⁶⁾以上のことは、日本映画週間が当時の中国で高く注目されていたと説明できよう。

1978年から1991年まで、中国における日本映画週間は毎年連続的に開催され、公開された映画は合計80余本ある。しかも、約半分の作品は1970年代末から1980年代前期にかけて公開されたものである。⁽⁷⁾従って、この時期も日本映画ブームのピークだとみなされている。この間で上映された日本映画は、前述のほかに高く評判されているのは『幸福の黄色いハンカチ』（1977年松竹製作）、『絶唱』（1975年Horipro Inc.製作）、『遙かなる山の呼び声』（1980年松竹製作）、『人間の証明』（1977年角川春樹事務所製作）、『Wの悲劇』（1984年角川春樹事務所製作）などがある。

この日本映画ブームに伴って、高倉健、中野良子、栗原小巻のほかに、山口百恵、倍賞千恵子など日本人俳優も中国で大変人気があった。その演技に魅了された一方、日本人スターの格好を真似することも出てきた。ひいては、スクリーンを通じて高度成長している日本の様子を伺い、日本へ留学する途につく人も少なくなかった。

三、日本映画週間の常態化

1980年代後期に入ってから、日本映画ブームが衰退し始めた。その時、中国では毎年平均的見れば5本の日本映画が公開されたが、その注目度と反響はすでに前と比べにならない。1992年から、中国はもう毎年のように日本映画週間を開催することをやめた。ただし、その代わりに映画回顧展などの形で日本映画を

(6) 「大衆映画」1979年第3、4、9期を参照。

(7) 『中国映画年鑑』、中国映画出版社、1981-1992年、及び劉文兵『中国10億人の日本映画熱愛史』集英社新書、2006年、第214-218頁を参照。

公開することになった。例えば、1993年中国映画資料館が主催する日本当代映画回顧展が7月15日から至9月15日まで二ヶ月にわたって、相次いで北京・上海・長春・成都・昆明・広州で行われ、『津軽じょんがら節』（1973年ATG製作）などの日本映画36本を上映した。しかも、そのほとんどが1980年代に製作されたものだといわれる。⁽⁸⁾つまり、この時から、中国においては映画週間という名に限らずより多くの形で日本映画を公開し、より深く文化交流をするようになった。

1993年10月、中国における初めての国際映画祭——上海国際映画祭⁽⁹⁾が生まれた。今回の映画祭では、日本人監督大島渚映画特別公開を行った。それ以来、相次いで山田洋次映画回顧展（2005年）と東京映画祭（2006年）などのイベントを催した。2007年第10回上海国際映画祭が行われる時、新たに日本映画週間という名で日本映画を公開した。しかも、今日までそのように使われていた。

2007年、ちょうど中日国交回復35周年にあたった。この年は中日文化・スポーツ交流年と名付けられ、シリーズの記念活動を展開した。上海国際映画祭・日本映画週間は、その主なイベントの一つである。2007年6月17日、第10回上海国際映画祭・日本映画週間が時代劇『大奥』（2006年東映製作）をオープニング作品としてスタートした。今回は（『武士の一分』（2006年松竹製作）、『眉山』（2007年東宝製作）、『NANA』（2005年東宝製作）など13本の日本映画を公開した。これについて、当時の新聞は次のように報道された。「中には、各ジャンルの作品と若手・ベテランなど各世代監督の新作が含まれ、スタイルがはるかに異なっていて、それぞれの特色があり、日本映画を集中的に見せるチャンスだといえよう。」⁽¹⁰⁾と同時に、今回の日本映画週間の趣旨は「調和の美」をテーマに、「調和ある美しい人間関係」「調和あるコミュニティ（都市）」と「調和ある文化」をポイントとして描き出すことにあると強調した。⁽¹¹⁾

しかし、その次の第11回、第12回上海国際映画祭（2008、2009年）には、日本映画週間が行われなかった。もちろん、これは日本映画の上映がなかったことを意味していない。逆に、第11回上海国際映画祭に公開された日本映画は14本が

(8) 『中国映画年鑑』、1994年、第348、465頁。

(9) 上海国際映画祭は最初2年に1回だったが、2001年の第5回目から年に1回に変更された。

(10) 「上海国際映画祭・日本映画週間」<http://www.chinadaily.com.cn>。

(11) 「「中日文化・スポーツ交流年」特集」<http://cn.explore.ne.jp>。

あり、しかも全部この二年間の新作である。その中に、『築地魚河岸三代目』（2008年松竹製作）が映画祭の「金爵賞」、『警泥』（2008年独立製作）が「アジア新人賞」に入選した。翌年、第12回上海国際映画祭に公開された日本映画は8作品がある。その中の『恋極星』（2009年日活製作）と『休暇』（2008年山梨県休暇製作委員会製作）も「アジア新人賞」に入選した。⁽¹²⁾

面白いと思わせるのは、2010年の第13回から日本映画週間は再び上海国際映画祭に復帰した。今回は11本の日本映画が上海の映画館20館で、合計32回公開され、多くの観客を動員した。また、記者会見、オープニングパーティーを開き、観客との交流会が8回も行われた。報道によると、閉幕式は上海万博演芸セーターで行われ、中国各地からの観客が日本人監督・俳優と親しく交流したという。⁽¹³⁾ この様子は1980年代の隆盛期とよく似ているが、その後の発展からみれば、ただ中国における日本映画週間が常態化することを示していると思う。

2011年と2012年、上海国際映画祭・日本映画週間は北京と共に開催された。

具体的みると、2011年6月8日、北京における日本映画週間と日本アニメ祭の開幕式が中国国家博物館で開催された。当時の中国国务院総理温家宝、日本首相特使麻生太郎、日本国大使丹羽宇一郎などが開幕式に出席した。これは中日両国が映画祭などの開催への重視を表す一方、文化交流を促進し、協力と相互理解を深めることへの期待とみなされている。オープニング作品『春との旅』（2010年T-JOY製作）の公開が北京に限られているので、今年北京における日本映画週間に上映された作品は12本あった。⁽¹⁴⁾ やや遅れて行われた上海国際映画祭・日本映画週間は11本の新作を公開したが、4本が映画祭の「金爵賞」と「アジア新人賞」に入選した。⁽¹⁵⁾

2012年、中日国交回復40周年にあたって、两国政府はこの年を「中日国民交流友好年」と名付けた。記念活動の一つとして、今年も北京と上海ではほぼ同時に日本映画週間が開催され、『ALWAYS 三丁目の夕日'64』（2012年東宝製作）など12本が公開された。そして、これらの日本映画は全部東日本大震災後製作され、日

(12) 「第11回上海国際映画祭」<http://ent.sina.com.cn> 及び「第12回上海国際映画祭」<http://ent.qq.com>。

(13) 「日本映画週間閉幕 常盤貴子人気女優賞受賞」<http://ent.163.com>。

(14) 「2011年日本映画週間・テレビ週間」<http://yule.sohu.com>。

(15) 「温家宝と麻生太郎2011年日本映画週間開始共同宣言」<http://japan.people.com.cn>。

本でも最も人気があったものだと紹介された。⁽¹⁶⁾

実は、上海国際映画祭と協力する前、北京ではかつて断続的に日本映画週間あるいは映画祭などを開催したことがある。新聞記事として報道されたのは、主に以下のイベントがある。

2001年6月、北京映画学院で、鑑賞無料という形で日本独立映画学会が主催する日本独立映画祭を行った。⁽¹⁷⁾二年後の2004年9月、中国国家ラジオ・映画・テレビ総局映画局が主催する日本映画週間は、北京の東方新世紀映画館で行われた。今回は日本映画の各時期の代表作への回顧を中心として、『七人の侍』(1954年東宝製作)、『犬夜叉』(2001年東宝製作)などスタイルが異なる日本映画7本を公開した。⁽¹⁸⁾

2006年、中国映画資料館・北京映画学院が主催する「秋の物語——日本映画週間」は11本の日本映画を公開した。と同時に、中日映画フォーラムをも行った。⁽¹⁹⁾2007年、中国国家ラジオ・映画・テレビ総局映画局と日本国文化庁が主催する「中日邦交正常化35周年記念——2007年日本映画祭」は、4日間で日本の若者たちの生活を描いている映画8本を公開した。特に言及すべきなのは、『天国は待ってくれる』(2007年GAGA・松竹製作)がまだ日本で公映された一ヶ月未満だという。⁽²⁰⁾

2008年、北京オリンピック大会が行われる一ヶ月前に、北京五輪委員会・中国国家ラジオ・映画・テレビ総局映画局・国家スポーツ総局が第4回北京国際スポーツ映画週間を共催した。スポーツを題材とした日本映画『銀色のシーズン』(2008年東宝製作)、『テニスの王子様 二人のサムライ The First Game (劇場版)』(2005年劇場版テニスの王子製作委員会製作)と『DIVE!! ダイブ』(2008年角川映画製作)が3本上映された。⁽²¹⁾

3年後の2011年、近年来中国で公開された日本映画は割に少なくなったということに鑑み、日本映画への認識を深めるために、第1回北京国際映画祭の一環

(16) 「2012年北京・上海日本映画週間」<http://www.mask9.com>。

(17) 「日本独立製作映画祭北京開催」<http://ent.163.com>。

(18) 「2004年日本映画週間北京開幕」<http://www.chinanews.com/news>。

(19) 「2006年北京日本映画週間11月開催」<http://www.gov.cn>。

(20) 「2007年日本映画祭北京開幕」<http://news.xinhuanet.com/society/2007-03/16>。

(21) 「『銀色のシーズン』でスポーツ映画週間の日本映画イベント開始」<http://news.cnnb.com.cn/system/2008/06/30>。

として日本映画祭が行われた。オープニング作品は、『クレヨンしんちゃん 超時空! 嵐を呼ぶオラの花嫁』(2010年東宝製作)である。上映された9作品はほとんどこの二年間日本で公開したばかりのものだという。⁽²²⁾

また、中日国交回復40周年を記念するため、2012年第19回北京大学生映画祭・日本青春映画週間を行った。このイベントは北京大学生映画祭組織委員会と日本国大使館・日本国際交流基金が協力して開催し、『初恋』(2006年GAGA製作)などの青春映画が10本上映された。そして、日本青春映画の現状というフォーラム及び「中国若手劇作家×日本映画人対談」という座談会も行われた。⁽²³⁾

以上のことからみれば、1990年代後半から2010年までに中国における日本映画週間が、北京と上海に限られて行われたことは明らかである。そして、今まで毎年恒例の番組のように北京・上海で日本映画週間を開催する。

しかし、2010年以来、ほかの中国都市で日本映画週間を開催する傾向が出てきた。例えば2010年、重慶市にある西南大学・四川外国語学院・重慶師範大学・南方翻訳学院などの大学は、より多くの学生に日本文化を了解させるため日本映画週間を行った。今回は重慶市人民対外友好協会と日本国駐重慶総領事館の共催で、『water boys』(2001年東宝製作)などのような時代劇・青春映画・トレンディ映画・アニメ動画6本を上映した。⁽²⁴⁾

また、2017年中日国交回復45周年を記念するため、広州・成都・福州で日本映画週間が行われた。翌年、広州・昆明で、2020年アモイでそれぞれ日本映画週間が行われた。このほか、2019年から日本映画フェスティバルというイベントが北京・済南・広州・深セン・成都で行われた。これらのことから、常態化する日本映画週間は毎年開催されるだけでなく、次第に地方の中心都市へと移転する傾向もみられる。

おわりに

以上のように、中国における日本映画週間への回顧を通じて、その発展が三つ

(22) 『『クレヨンしんちゃん』で北京国際映画祭の日本映画イベント開始』<http://culture.people.com.cn>。

(23) 「日本青春映画週間——第19回北京大学生映画祭」<http://www.mask9.com>。

(24) 『『water boys』と『時空をかける少女』と約束 日本映画週間今日から巡回公演』<http://cq.cqnews.net>。

の段階に分けられることがはっきり見える。この三つの段階の映画週間はその時代背景の違いによって、それぞれの特徴を持っている。始まりの段階ではただ1956年に1回だけ行われた。当時中日がまだ国交回復されていなかったので、両国の相互理解にとって珍しいチャンスだといえる。しかし、公開された映画本数が少なく、内容も主に反戦・反資本主義に集中していて、その影響はわずかだったと思われる。

始まりの段階を一つの点としたら、1978年から1991年までの段階は毎年連続的に開催されたので、まるで一本の線のようなものである。特に、中国の改革開放当初にあたって、日本映画がもたらしたショックが非常に大きかったと言える。日本映画ブームを引き起こし、6～7年にわたって沸いた。

三つ目の段階にはいると、すなわち1992年から今まで、日本映画週間は絶えずに開催された。連続的に行われたこともあるし、別々単独で行われたこともある。全体的に、いくつかの点と何本の線のように見える。この段階では、中日交流の拡大と深化に従って、日本人・日本文化と出会うルートと方式がますます多様になってきた。映画はすでに唯一な窓口ではない。しかも、2010年までに日本映画週間は主に北京と上海に限られて開催された。その射程が周りの地方に入ったが、ほかの都市の立場に立ってみると、無関係のように感じさせた。ゆえに、その影響力も自然に拡大できないと考えられる。

まとめてみれば、この三つの段階の日本映画週間は、その開催する時代背景の違いがあり、開催地への選択も異なった。その上選択された映画内容の制限などによって、もたらした影響も同時に論じることができない。にもかかわらず、中国における日本映画週間は同じところを持っている。すなわち、映画が公開された一方、フォーラムや交流会などを行い、中日映画人同士及び観客との交流を促進させた。特に、中国人の日本文化への受容と日本社会への認識においては、独特な役割を果たしていたといえよう。

今後中国における日本映画週間は、どのように開催、いかにも現実を踏まえて、未来へ向け、より多くの空間を開拓するか、まだ考えるべきことが少なくないと思う。『武士の一分』のように、映画の題名などをほぼ翻訳しないまま使われていたことは、きっと日本映画への理解によくないといえる。従って、今までの歴史を参考にして、合理的に開催する時間づくり、開催地と公開映画の選択、正しく翻訳するなどはその中の最も重要なことだといえよう。

